かすかな声

太宰治

信じるより他は無いと思う。私は、馬鹿正直に信じる。ロマンチシズムに拠って、夢の力に拠って、難関を突破しようと気構えている時、よせ、よせ、帯がほどけているじゃないか等と人の悪い忠告は、言うもので無い。信頼して、ついて行くのが一等正しい。運命を共にするのだ。一家庭に於いても、また友と友との間に於いても、同じ事が言えると思う。

信じる能力の無い国民は、敗北すると思う。だまって信じて、だまって生活をすすめて行くのが一等正しい。人の事をとやかく言うよりは、自分のていたらく

に就いて考えてみるがよい。私は、この機会に、なお深く自分を調べてみたいと思っている。絶好の機会だ。

信じて敗北する事に於いて、悔いは無い。むしろ永遠の勝利だ。それゆえ人に笑われても恥辱とは思わぬ。けれども、ああ、信じて成功したいものだ。この歓喜！

だまされる人よりも、だます人のほうが、数十倍くるしいさ。地獄に落ちるのだからね。

不平を言うな。だまって信じて、ついて行け。オア

シスありと、人の言う。ロマンを信じ給え。「共栄」を支持せよ。信ずべき道、他に無し。

甘さを軽蔑する事くらい容易な業は無い。そうして人は、案外、甘さの中に生きている。他人の甘さを嘲笑しながら、自分の甘さを美徳のように考えたがる。

「生活とは何ですか。」

「わびしさを堪える事です。」

自己弁解は、敗北の前兆である。いや、すでに敗北の姿である。

「敗北とは何ですか。」
「悪に媚笑(びしょう)する事です。」
「悪とは何ですか。」
「無意識の殴打です。意識的の殴打は、悪ではありません。」

議論とは、往々にして妥協したい、いい情熱である。

「自信とは何ですか。」
「将来の燭光を見た時の心の姿です。」
「現在の？」
「それは使いものになりません。ばかです。」

「あなたには自信がありますか。」
「あります。」

「芸術とは何ですか。」
「すみれの花です。」
「つまらない。」

「つまらないものです。」

「芸術家とは何ですか。」

「豚の鼻です。」

「それは、ひどい。」

「鼻は、すみれの匂いを知っています。」

「きょうは、少し調子づいているようですね。」

「そうです。芸術は、その時の調子で出来ます。」

底本：「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房
　　1989（平成元）年6月27日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房
　　1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月
初出：「帝国大学新聞」
　　1940（昭和15）年11月25日発行
入力：土屋隆
校正：noriko saito
2005年3月17日作成
青空文庫作成ファイル：